

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学四年生の泰司^{たいじ}（タイ）は、去年の秋、この町に引っ越^こしてきた。気の合う友人、三上くんとのお会いもあり、楽しい日々を過ごしていたが、父親の転勤により、南の土地へ三月に引っ越すことが決まった。そのことを誰にも打ち明けられずにいる泰司は、以前三上くんが「毎年『かまくら』をつくっている」と言っていたことを思い出し、最後の思い出として一緒に『かまくら』をつくりたいとひそかに願っていた。

午前中の授業を受けている間に、空はいつそう寒々しくなった。風も強くなって、建て付けの悪い窓をガタガタと鳴らしていた。

「雪、降るよな、これ、絶対に降るよな」

給食のときに泰司が言うと、三上くんはあっさり「降っても、積もらないよ」と言った。「雪は夜中のうちに降らないと積もらないんだよなあ」

「そんなことないよ」

泰司はムツとして言い返した。「積もるよ、絶対」——そうでなきゃ困るんだ、と心の中で付け加えた。

「ちよつと降って、それでもう終わりだよ」

「積もるっ」

「積もらないっ」

「積もるったら、積もるんだよ」

「なに言っただよ、積もったら困るだろ、サッカーでなくなるだろ」
「雪合戦しようよ」

「そんなのがきつぽくて、つまらないって。サッカーのほうが一億倍面白いだろ」

なに言ってるんだ、と泰司は口をとがらせた。サッカーは確かに面白い。でも、サッカーは、いつでも、どこでも、誰とでもできる。雪合戦は、冬が寒い町で、雪の積もった日に、その町の友だちとしかできない。これからずっと南のほうの^(a)アタカイ町にばかり引越していくのなら、雪合戦は、もう一生できないかもしれないのだ。

「積もったら、『かまくら』つくろう」

せいっぱい気を取り直して言った。「オレ、つくり方知らないから、教えてよ」と笑った。

でも、三上くんはそっけなく「オレだって知らないし、そんなのつくれないよ、どうせ」と言った。「『かまくら』ができるほど積もるわけないだろ」

「だって、去年、毎年つくってるって……」

「そんなこと言ったっけ？」

1

頬がカッとアツくなった。

「……嘘だったの？」

「嘘っていうか、冗談っていうか、よく覚えてないけど」

三上くんは、ハハッと軽く笑った。

その笑い声が、耳の奥——いや、^(b)胸の奥のいちばん敏感な場所に針を刺した。

「それに、タイ、今日は絶対に積もらないって。おまえ、去年引越してきたからわかんないと思うけど、オレ、知っているもん。初雪って、毎年ばらつと降るだけなんだから」

三上くんはそう言っ、まわりの友だちにも「なあ、そっだよな？」と一人ずつ訊いていった。まっちゃん、すぎちゃん、タンカくん、いっちゃん……全員、三上くんの言葉にうなずいた。

三上くんは「そうだろ、そうだろ、そっだよなあ」と満足そうにうなずいて、泰司を振り向いた。

「な？わかっただろ？タイも来年から覚えとかないと」

胸の奥の針が——深々と沈んだ。

泰司は「ふざけるな！」と怒鳴って、三上くんにつかみかかった。

放課後になっても、雪は降らなかった。空の様子はいつ降りだしても不思議ではないのに、風が強くなっただけで、雪は、だめだ。

泰司はうつむいて降りじたくをして、友だちの誰とも話をせずに教室を出て行った。

ケンカは引き分けに終わった。二人一緒に先生に叱られた。先生に「なんでケンカになったの？」と訊かれても、泰司はなにも答えなかった。先生は「どっちが先に手を出したの？」とも訊いてきたが、三上くん A 黙っていた。

仲直りはしなかった。だって悪いのはあいつなんだから——三上くんも同じように思っているはずだから、よけい自分から謝るのは嫌だった。

2

ランドセルがやけに重い。半ズボンからのぞく太股や膝小僧が寒い。ジャンパーの袖に手を隠して、とほとほと校門を

出たとき、後ろから呼び止められた。

「なにやってんだよ、待ってて言ってるだろ」

三上くんはランドセルを叩かれた。

「……そんなのオレの勝手だろ」

うつむいたまま低い声で答えると、三上くん B 「さっき、つていうか……去年、ごめんな」と言った。なんだこいつ、あっさり謝っちゃって、ばーか。

泰司は足を速めた。三上くんもついてきた。泰司は逃げる。三上くんは追いかける。逃げる。追いかける。逃げる。追いかける。逃げる。追いかける。逃げる……。

頬に冷たいものが触れた。

3

雪だ。風に乗って、白いものが舞い落ちていた。積もるような降り方ではない。ほんの少し雲が晴ればすぐにやんでしまいそうな、頼りなげな初雪だった。

それでも——雪だ。

三上くんも立ち止まって、空を見上げた。

「雪だなあ……」

なに言ってるんだ、そんなの見ればわかるだろ、と泰司はにらむように空を見上げる。

「これだと、意外と奇跡で積もるんじゃないか？」

調子のいいことばかり言ってる。

ばーか、とつぶやくと、自然と頬がゆるんで、まつげに雪が降り落ちた。

三上くん

C

その場でぴょんぴょん跳びはねた。口もぱくぱく開けている。

「なにしてるの？」

「雪、食ってるの。これだったら、積もらなくても遊べるだろ」

ぱくつ、ぱくつ、と降ってくる雪を食べる。ほんとうに口の中に雪が入っているかどうかはわからなかったが、三上くんはとてもおいしそうな顔をしていた。

ばーか、ばーか、雪合戦より一兆倍ガキっぽいだろ、こんなの。

心の中でつぶやきながら、泰司もやってみた。意外と難しい。だから、たまに口の中に冷たいものが入ってジュツと溶けると、やった、と声をあげたくなるほどうれしかった。

ばーか、ばーか、ばーか……。

心の中のつぶやきは、最後に、変わった。

「オレ……三月で転校するんだ」

三上くんは、ふうん、とうなずいただけで雪を食べつづけた。

それだけ？

泰司はちょっと拍子抜けして、でも、がっかりしたのを悟られなくて、黙って口をぱくぱくと動かした。ずっと上を向いていたのでクビシジが痛くなってきた頃、三上くんの声が、やっと聞こえた。

「なんで？」

思わず振り向くと、三上くん

D

「なんで転校しちゃうの？」と重ねて訊いてきた。

「なんで、って……お父さんが転勤するから」
 「それで一緒に行くの？」
 「うん……」

ふうん、と三上くんはまたうなずいて、「いそろうは？」と訊いた。「ドラえもんとか、オバケのQ太郎みたいなのがあまりにも唐突な一言にどう応えていいのかわからず、泰司はちよつと困った顔で笑うだけだった。でも、三上くんは「オレ、二段ベッドでもいいけど」と怒った声でつぶつた。「二段ベッドの下の方でも、いいけど」一瞬きよんとした泰司だったが、あ、そうか、と気づくと、困惑した笑顔が微妙にゆがんだ。三上くんも自分の言葉に急にテれてしまったみたい、いきなり駆けだした。空を見上げたまま。口を開けたまま。飛行機みたいに両手を広げて。

しばらく走ったところで立ち止まり、振り向いた。

三上くんの顔もゆがんでいた。何か言いたげに口が動きかけた。でも、それを振り払うように、「走ってたほうが、雪、たくさん食える」と笑う。「ほんとほんと、今度はほんと」と念を押して、また空を見上げ、口を開けて走り出す。泰司も追いかけた。

さっきの三上くんを真似して両手を翼のように広げ、口を大きく開けた。

雪が降る。雪が口に入る回数止まっていたときとたいして変わらないような気がしたが、不思議なほど目のまわりによく当たる。まぶたに。まつげに。目尻に。目頭に。ひやつとした雪が降り落ちて、溶けて、また当たって、また溶けて。だから、目がひくひくしてしかたない。

雪が降る。頬で溶けて口に入った雪は、ほのかにしょっぱかった。

※いそろう……他人の家の一角を借りて、住まわせてもらうこと。
 ※時化する……雨や風で海が荒れる。
 ※しけ 時化た海の波しぶきを風が運んで、雪とまじり合ったせいだ。
 たぶん。

(重松清『その年の初雪』)

問一 線部(a) (e) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部X・Yの言葉の意味としてもつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

X 拍子抜け		Y 念を押す	
ア	期待外れで腹を立てること。	ア	不安なのでもう一度言うこと。
イ	張り合いがなくなること。	イ	信じてもらうよう頼むこと。
ウ	タイミングが合わないこと。	ウ	正しいかどうか判断すること。
エ	予想外の展開に腰が抜けること。	エ	何度も重ねて確かめること。
オ	外的外れな発言をすること。	オ	よく考えてから発言すること。

問三 本文は、前半と後半に分けられます。後半が始まる最初の五字を抜き出して答えなさい。

問四 A～Dに入る文として、適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア は泰司が笑ったので安心したように
 イ も口をとがらせて
 ウ はへへと笑って
 エ は空を見上げたまま

問五 本文には次の一文が抜けています。この一文を入れるのに適切な場所を 1 3 から選び、番号で答えなさい。

あつ、と泰司は声にならない声をあげて立ち止まった。

問六 ——— 線部①「胸の奥のいちばん敏感な場所に針を刺した。」とは、どういうことですか。具体的に説明しなさい。

問七 ——— 線部②「あ、そうか、と気づくと」とありますが、泰司はどのようなことに気づいたのですか。その内容を三十字以内で説明しなさい。

問八 本文中に描かれている泰司と三上くんの人物像として、適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 泰司は、自分の感情を言動や表情にそのまま出す一方で、引越しのつらさをなかなか打ちあけることができないでいる少年。

イ 三上くんは、軽い気持ちで嘘や冗談を言うお調子者である反面、自分の発言への反応がにぶい泰司に怒りをぶつける短気な少年。

ウ 泰司は、自分の思いを言葉にして伝えることが苦手で、嫌なことがあった時はだまって教室を出ていくようなおとなしい少年。

エ 三上くんは、素直で単純な性格であるが、てれながらも、友人の心をくんでその場を和ませることができる優しい少年。

オ 泰司は、ぱらっとしか降らない初雪にも希望を捨てず『かまくら』をつくれと信じる、いちずで何事も最後まであきらめない少年。

カ 三上くんは、何事にも相手の気持ちを思いやることが苦手で、『かまくら』づくりに必死になる泰司を傷つけたことに気づかない少年。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

哲学といえは、たいていのひとは、ソクラテスやプラトンからデカルト、カントをへて、ハイデガー、ウイットゲンシュタインにいたる西洋哲学史上の人物を思い浮かべるようだ。そして、哲学を学ぶとは、そういうひとたちの書いたものを読んで、理解することだと思っているひとが多い。しかし、^①そういうやり方で、哲学の真髄に触れることは、絶対にできない。少なくとも、ぼくはそう確信している。

本人にとつてはどんなに興味深い、重大な意味をもつものであつても、他人の見た夢の話を書くことは、たいていの場合、退屈なものだ。それと同じように、^②他人の哲学を理解することは、しばしば退屈な仕事である。そして、どんなによく理解できたところで、しょせんは何かまとはずれな感じが残る。ほんとうのことを言つてしまえば、他人の哲学なんて、たいていの場合、つまらないのがあたりまえなのだ。おもしろいと思うひとは、有名な哲学者の中に、たまたま自分によく似たひとがいただけのことだ、と思つたほうがいい。いずれにしても、他人の哲学を研究し理解することは、哲学をするのとはぜんぜんちがう種類の仕事である。

哲学というものは、最初の第一歩から、つまり哲学なんてぜんぜん知らないうちから、何のお手本もなしに、自分ひとりではじめるのでなければ、けつしてはじめることができないものなのだ。つまり、哲学の勉強をしてしまったら、^③もうおそいのだ。勉強は哲学の大敵である。

そんなことをいっても、何の手だてもなしに、自分ひとり、^{*}はだか一貫で、哲学をはじめることがほんとうにできるものなのだろうか？ と、こう思うひとも多いにちがいない。だが、できるのだ。ぼくが読者の方々に伝授したいやりかたは、とてめかたんなものだ。大人になるまえに抱き、大人になるにつれて忘れてしまいがちな疑問

の数々を、つまり子どものときに抱く素朴な疑問の数々を、自分自身がほんとうに納得がいくまで、けっして手放さないこと、これだけである。

子どもとは何だろう。そして、子どもが大人になるとは、どういうことだろう。思うに、それはこうだ。子どもは、まだこの世の中のことをよく知らない。それがどんな原理で成り立っているのか、まだよくわかっていない。では、大人はわかっているのだろうか。ある程度はそうだ。大人はわかっている。しかし、全面的にわかっているわけではない。むしろ、大人とは、世の中になれてしまつて、わかっていないということを忘れてしまっているひとたちのことだ、とも言えるだろう。

ソクラテスはかつて、こんなことを言った。

- ①この点で、世の識者たちよりも自分のほうがものごとがよくわかっている、と言えるだろう、と。
- ②それに対して、自分は、知らないということを知っている。
- ③つまり、わかっているということを知れてしまっている。
- ④つまり、わかっているということを知れていない。
- ⑤世の識者たちは、自分がだいたいなことを知らないということに気づいていない。

「知らないということを知っている」ことを「無知の知」という。知っていると思い込んでいるひとは、もう知ろうとしないだろうが、知らないとわかっているなら、なお知ろうとしつづけるだろう。知ることを求めつづけるこのありかたを「フィロソフィア」という。「フィロ」とは愛し求めることであり、「ソフィア」とは知ることである。つまり、

「フィロソフィア」とは、知ることを愛し求めることを意味する。これが、哲学という言葉（英語ではフィロソフィ）の語源だ。

④だとすれば、子どもはだれでも哲学をしているはずである。子どもは、たしかに、自分が知らないということを知っている。ただ、子どもはソクラテスとちがつて、たいていの場合、大人たちもほんとうはわかっているのに、わかっているということがわからなくなってしまうだけだ、ということを知らない。そして、「大人になれば自然にわかる」とかなんとか教えられ、そう信じ込まされて、わかっていないということがわからない大人へと成長していくのだ。

大人だつて、対人関係とか、世の中の不公平さとか、さまざまな問題を感じてはいる。しかし大人は、世の中で生きていくということの前提となつていようなことについて、疑問をもたない。子どもの問いは、その前提そのものに向けられているのだ。世界の存在や、自分の存在。世の中そのものの成り立ちやしくみ。過去や未来の存在。宇宙の果てや時間の始まり。善悪の真の意味。生きていることと死ぬこと。それに世の習いとしての倫理（たとえば、知っている人に会ったらいさつするとか）の不思議さ。などなど。こうしたすべてのことが、子どもにとっては問題である。

子どもは、ときに、こうした疑問のいくつかを、大人に向けて発するだろう。だが、たいていの場合、大人は答えてくれない。答えてくれないのは、^⑤問いの意味そのものが、大人には理解できないからである。かりに答えてくれたとしても、その答えはまとはずれに決まつている。せいぜいよくて、世の中で通用しているたてまえを教えてくれるか、何だか知らないがそうなっているのだよ、と率直に無知を告白してくれるか、そんなところだろう。子どもは、問うてみても無駄な問いがあることをさることになる。

つまり、大人になるとは、ある種の問いが問いでなくなることなのである。だから、それを問い続けるひとは、大

人になってもまだ〈子ども〉だ。そして、その意味で〈子ども〉であるということは、そのまま、哲学をしている、ということなのである。

(永井均『子ども』のための哲学)

※ソクラテス、プラトン、デカルト、カント、ハイデガー、ウイトゲンシュタイン……いずれも有名な哲学者。

※真髓……奥深く大切なことから。

※はだか一貫で……自分の身一つで。

※識者……知識やしつかりしたものの見方を持っている人。

問一——線部①「そういうやり方」とありますが、どういうやり方ですか。三十字以内で答えなさい。

問二——線部②「他人の哲学を理解することは、しばしば退屈な仕事である。」とありますが、なぜですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人の哲学は、他人が大切に思う考え方であり、自分の考え方とはまったくかけ離れていて、それを理解し受け入れることは難しいことであるから。

イ 他人の哲学は、自分以外の人が考えたことであり、それを理解することには相当な困難がともない、実際は不可能なことであるから。

ウ 他人の哲学を理解したとしても、自分にとっては何のプラスにもならないとわかっているので、興味も関心もわからないから。

エ 他人の哲学を理解することは、結局他人の考えたことをなぞることにすぎず、自分にぴたりとあてはまるものはほとんどないから。

オ 他人の哲学はそれが優れていなければならないほど、理解するためにはそうとうな時間がかかり、努力をしている間につまらなくなってしまうから。

問三——線部③「勉強は哲学の大敵である。」とありますが、勉強と哲学とはどう違うのかを、それぞれ説明したうえで、なぜそれが大敵なのかを答えなさい。

問四—— でかこまれた部分の文章を正しくならべかえて、数字で答えなさい。

問五——線部④「だとすれば、子どもはだれでも哲学をしているはずである。」とありますが、この表現から、筆者は子どもがどのようなものであるはずだと考えていることがわかりますか。「と考えている。」に続く形で二十字以内で答えなさい。

問六——線部⑤「問いの意味そのものが、大人には理解できないからである。」とありますが、なぜですか。子どもと比較しながら、本文中の言葉を用いて六十字以内で答えなさい。

（注意 字数に制限があるときは「、」や「。」も一字とします。）

総 点	
科 目	
国 語	
受験番号	
氏 名	

問八	問七	問六		問五	問四	問三	問二	問一
					A		X	(a)
								かい
					B		Y	
								く
					C			
								(d)
					D			
								(e)
								じり

[illegible]